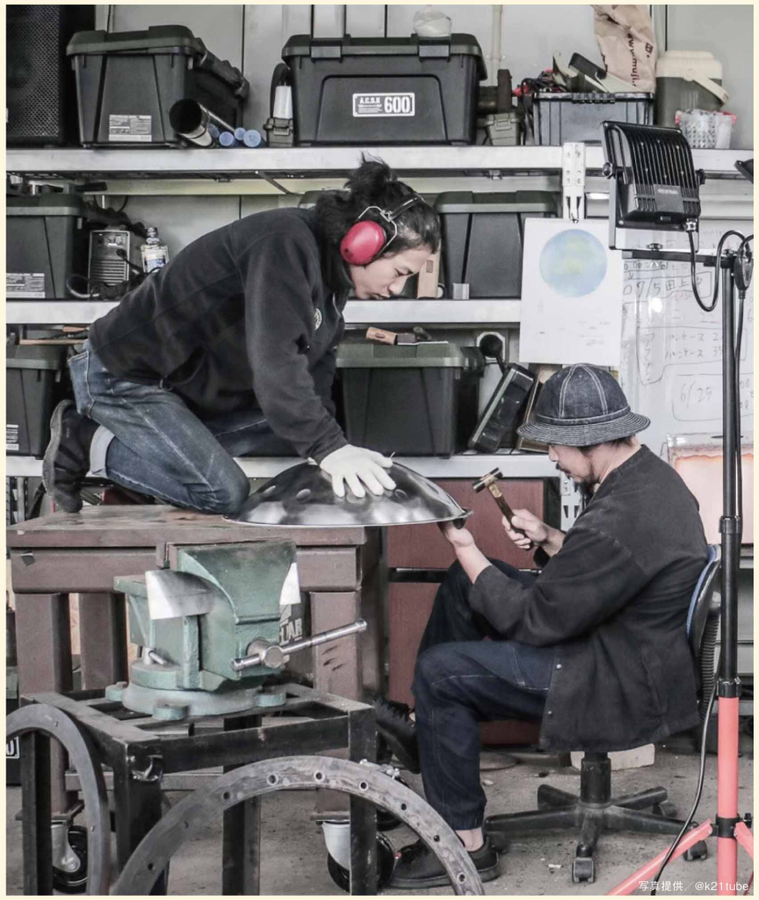
巻頭特集

鎚起銅器×新楽器 ハンドパンの響き満ちるまちへ



写真提供／@k21tube

響楽舎 時田 清正さん（左）
ハンドパンクリエイター。茨城県出身。24歳。ハンドパンをつくるため渡邉さんの元で鎚起銅器の技術を学びながら独学でチューニングをマスター。楽譜は読めないというが渡邉さんいわく「耳コピの鬼」。

鍛工舎 渡邉 和也さん（右）
美大在学時に鍛金の面白さを知り〈玉川堂〉に入社。5年の修業の後独立。伝統にとらわれず、カーブランド主催のプロジェクトで全国51名の匠に選ばれるなど、独自商品の開発も多く行う。

写真提供／@salchowphoto

まるでUFOのような不思議な形状。約20年前にスイスで生まれた楽器、ハンドパンの希少な国内メーカー〈響楽舎(きょうがくしゃ)〉を燕市に設立した時田さんと、師である鎚起職人の渡邉さん。お二人に楽器の魅力や開発秘話、実現したい未来のお話などを聞きました。

技術力と情熱が生んだメイドイン燕のハンドパン

奏者が膝の上に抱えた金属のドーム体を手で弾くと幻想的で複層的な共鳴音があたりに満ち、心地よく包まれるような柔らかな音色が響く……それがハンドパンの魅力です。

茨城県出身の時田清正さんがこの楽器に出会ったのは高校時代。同級生の演奏を聴いたのがきっかけでした。「音楽が好きでギターを弾いていましたが、見た目の不思議さと音色にひかれました」と時田さん。当時国内では一人しかこの楽器を製作していないと聞き、作ってみたいと思うようになったといいます。高校卒業後一度は普通に就職したものの思いが募り、ハンドパン奏者として活動を始めた友人に薦められた県央地域の金属加工技術を学ぼうと、三条市の地域おこし協力隊に応募。2018年夏に着任しました。

任期中に、燕市の老舗〈玉川堂〉から独立し鎚起銅器の新たな可能性を追究していた〈鍛工舎〉の渡邉和也さんと出会い、共にハンドパンの開発に取り組むようになったといいます。昨年8月の任期終了後は〈鍛工舎〉に間借りして、開発を継続。今年ようやく安定した製品を完成できるようになったことから〈響楽舎〉を立ち上げたのです。渡邉さんによれば「これまでも県央地域で楽器メーカーの依頼を受けてパーツを製造する工場はあったと聞いていました。しかし1から10まですべての工程を燕の地で完結させ、オリジナルの楽器を作り上げた意義は大きい」とのこと。

伝統の技で新たな楽器を手探りの開発・製品化

しかし、製作は苦労続きだったといいます。開発元のスイス企業ではその方法を秘匿。現在欧米を中心に150以上あるメーカーがそれぞれ素材、技術、形状、音階まで独自の工夫を凝らしてつくっている状態で、一から手探りのスタートでした。

ステンレスの板をドーム型に成型し、チューニングしてから上下を合わせる、単純な構造ではありますが「見よう見まねで作った最初の物は音が鳴らなかった」と渡邉さん。加工法を変えたり手順を変えたりを繰りかえし製作した120台のうち2／3ほどは楽器と呼べないもので、完成できないのではと不安も抱いたといいます。それでも続けていると、今年の2月ごろ「いきなり〝これか〟と光の射す瞬間が訪れ、ようやく出荷できる品質になりました」。

作業は基本的に、鍛金を渡邉さん、チューニングを時田さんと分担していますが、最近は時田さんの鍛金技術も上がり、9割方二人で製作できるようになっているそう。

ハンドパンの二つのくぼみには三つの音が入っており、それが響き合い和音を奏でます。どこを鳴らしても不協和音が出ないのが特徴ですが、一つを調整すると隣がずれるなど、チューニングに手間がかかるもの。時田さんは根気よく叩きながらコンピューターを用いて音を合わせていきます。

音階、音数、音域なども個体ごとに変わり、できあがった製品も奏で方で全く違う音を生む無限のバリエーションを持つ楽器。ハンドパンをつくることは、熟練した職人である渡邉さんにとっても、これまでとは全く違う挑戦だったといいます。

異なる世代の二人が、伝統技術と音楽的センスを持ち寄りつくりあげた結晶が形になり「やっとスタートラインに立った」と渡邉さんはいいます。

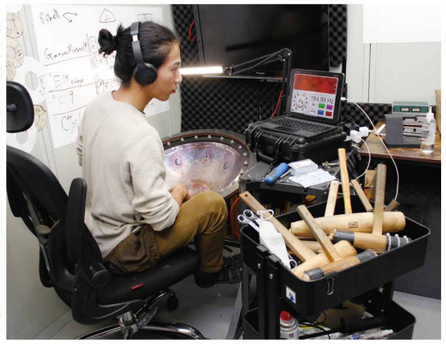
地元生まれの楽器を皆に楽しんでもらいたい

時田さんは、ハンドパンと誕生したばかりの〈響楽舎〉を知ってもらおうと、SNSや動画サイトで情報発信を始めました。県内各地の音楽イベントなどにも参加し、演奏を披露しています。さらに今後はWebページやECサイトも開設して認知度を上げ、プロモーションに力を入れていきたいと意欲的。

渡邉さんは、師匠としても人生の先輩としても、そんな時田さんがこの仕事を事業化して継続できるようにさまざまなアドバイスとサポートをしています。それは、かつて老舗から独立し、利益だけでなく趣味としてでもなく、情熱を燃やせるものづくりを求めてきた自身の姿と重なるものを感じているからかもしれません。

今二人が思い描く〈響楽舎〉とハンドパンの未来は、開発を続けつつスクールや見学可能な工房を開設して、愛好者の裾野を広げていくこと。そして、地域の子どもたちに地元産の楽器があることを知ってもらい、親しみ楽しんでもらえるよう、触れ合う機会を持つこと。渡邉さんはいいます「ものづくりのまちの新しい文化として、この音が浸透するとうれしいですね」と。やさしい和音がまちに満ちる、それは素敵な未来かもしれません。

▶もともとはドラム缶から作られた打楽器。〝スティールパン〟から発展したハンドパン。深みのある音が響き合う神秘的な音色が特長。



▶繰り返し音を確認し調整を重ねる様子はまさに職人。「作って売るだけではなく、チューニングやメンテナンス、スクールなど購入後のサポートも手厚くしていきたい」と時田さん。

▶「沼垂発酵フェスティバル 音楽で醸す」ではアーティストとして出演。「他の楽器とのセッションにも新たな可能性を感じた」と時田さん。

写真提供／@initial__d__

ハンドパンの音色を
YouTubeチャンネルでチェック! ▶▶▶

information

響楽舎 燕市笈ケ島4694-1
kyogakusha

ハンドパンに関する問合せ・
イベント出演依頼は
ホームページより

11月のイベント出演予定

沼垂ゆったりコンサート 入場無料

とき：11/19(土) PM～
ところ：しんこ屋（新潟市中央区沼垂東2-1-17）